

ブック

「人間関係の常時接続」により、リアルとネットが地続きの世界になった。本書は、各種データーを駆使し、その自由さが満足感を上昇させるとともに、「安定した基盤がないため不安感も募る」という負のスパイラルを呼び起こすとい

う。日本の女子中高生は、中年サラリーマンよりも日常的に疲れやストレスを感じている。そのストレス源は、先輩や後輩とのタテ関係ではなく、同級生とのヨコ関係にある。

そのための同調圧力がいじめにもつながるといふ。

土井氏は、快楽ではなく不安からのスマホ依存、イッメン（いつも一緒にいるメンバー）同士のしがらみによる親友を作れない状況、承認願望（「いいね！」を押してもらうこと）の肥大化などを指摘する。その社会的背景としては、2001年の小泉

つながりを
煽られる
子どもたち

ネット依存といじめ問題を考える

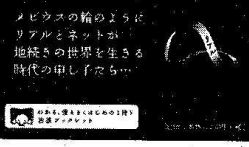
土井 隆義

土井隆義 著

670円 岩波ブックレット

☎03-5210-4111

つながりを煽られる子どもたち
ネット依存といじめ問題を考える



内閣の新自由主義を特筆する。不確実性が可能性ではなくリスクとしてとらえられ、新しい出会いよりも目先の確実な人間関係を求めるようになったというのだ。

終章「常時接続を超えて」では、「学校や地域の『みんな』という場の倫理が、個の倫理を圧殺しかねない」と指摘する。その上で、「自分が求められ、頼りにされれば、

異質な相手ともつながり、そこに自分の存在価値を見出す」とし、学級内の閉じた強固な一致団結ではなく、ゆるやかに外部に開かれたつながりにするよう提唱する。

評者は、学校のもう一つの役割を感じる。授業は一人の世界に埋没させて、自己内対話を行わせる時間ではないか。それは、彼らをつながり依存から解放させて自立させる貴重な時間になると考える。「みんな」への負の同調圧力を助長するようなことがあってはならない。

（聖徳大学教授・西村美東士）